様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６３３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５２９３４４６

研究課題名（和文）女性がん患者のリプロダクティブヘルスに関する選択を支える看護教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of nursing education program to support decision making on reproductive health of female cancer patients

研究代表者
林　直子（HAYASHI, Naoko）

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：３０３２７９７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、女性がん患者のリプロダクティブヘルスに関する専門的知識を習得する看護職向け教育プログラムを開発することを目的とした。本研究では、生殖年齢の罹患者が多い乳がんに特に焦点をあてたプログラムを開発することとした。研究は①文献調査、②乳がん診療に携わる医師、看護師ならびに乳がん患者を対象としたインタビュー調査、③全国のがん拠点病院で乳がん医療に携わる医師、看護師を対象とした質問紙調査（web調査）、④がん看護に携わる看護師向けのe-learning教材の開発の４段階で構成した。文献調査、インタビュー調査、web調査の結果から学習教材の内容を同定し、e-learing教材の試作版を作成した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop an education program for oncology nurses to obtain expertise on reproductive health of female cancer patients. In this study, we developed a program focusing particularly on breast cancer as a large number of breast cancer patients are in reproductive age. The research project consisted of 4 parts: (1) a literature review, (2) interviews for doctors and nurses who were involved in the breast cancer medical care, and breast cancer patients, (3) nationwide survey through the internet targeting doctors and nurses involved in breast cancer patients' care at designated hospitals for cancer, and (4) development of e-learning program for nurses who care for breast cancer patients. We identified the content of learning materials from the results of literature survey, interviews and the web survey, and developed trial version of e-learning educational program.

研究分野：がん看護学

キーワード：がん看護　乳がん　リプロダクティブヘルス　e-learning　意思決定支援　学習教材

## １．研究開始当初の背景

がん医療の革新的な進歩によりがんの治癒率が飛躍的に向上し、がん患者の生存期間の延長がもたらされた。中でも化学療法、放射線治療の発展はわが国のがん対策基本計画の重点課題に位置づけられ、多岐にわたる抗がん薬、分子標的薬の導入により多くの恩恵がもたらされた。このように、がんという診断が必ずしも死を意味するものではなくなり、がん治療を日常生活の一部にしながらがんと共に生きる、あるいはがん治療の後の人生を生きるがんサバイバーの長期的な健康問題、QOL への関心が高まっている。

また、生殖補助医療（ART）も近年著しく発展し、閉経前の女性がん患者とその家族に対し、がん治療後に子どもを生み育てる新たな可能性をもたらした。がん治療による妊孕性の障害とは、化学療法、放射線治療により女性が生来有する卵子数が減少することを意味する。がん治療を受ける女性患者のための妊孕性温存の選択肢として、受精卵凍結、卵子凍結、卵巣凍結、放射線治療時の性腺遮蔽、卵巣移動のほか GnRH アゴニスト投与などの方法があり、生殖医療医は初回面談で現時点での妊孕性、がん治療を行った後に妊娠する可能性、妊孕性温存の方法、妊孕性温存治療を行った後の妊娠の可能性、妊孕性温存治療ががんやがん治療に及ぼす影響について患者に説明している（塩田,2011）。そのため、患者はがん治療の内容および時期と、それに応じた生殖補助医療の可能性と実施時期を十分に検討した上で、意思決定することが必要となる。

がん患者のリプロダクティブヘルスに対する取り組みは始まったばかりであり、当該分野の研究は、国内外を問わず未だ少ない。がん患者のリプロダクティブヘルスに関わる看護職の役割として、Kramer は処置（治療）に関する患者教育を行なうこと、処置（治療）前後の患者のセルフケアについて理解を促すこと、患者が精神的苦痛をいつ感じているか、どのような心理社会的支援が必要かを把握し患者にナビゲーションサービスを提供することとしている（Kramer,2012）。ナビゲーションサービスとは、複雑ながん治療に加え生殖医療にもかかわる患者が混乱をきたさぬよう、患者の案内役を担うコンシェルジュのような役割を意味する。女性がん患者のリプロダクティブヘルスにおいて、患者がどの時期にどのような情報を希望しているのか、実際に医療者からどのようなサポートを得ていかなる選択をしているのか、医療者にどのような支援を求めているのか、患者を支援する上で看護職に必要な知識とケアは何かを明らかにし、専門的知識を修得する教育プログラムを開発することは、治療期にある女性がん患者のリプロダクティブヘルスに関する選択を支える上で極めて重要である。

## ２．研究の目的

女性がん患者のリプロダクティブヘルス、すなわち将来の妊娠・出産に関わる選択において、必要ながん治療、生殖医療を遅れることなく受けつつ患者の意思を尊重した選択ができるよう支援することが重要である。そこで本研究では、女性がん患者のリプロダクティブヘルスに関する専門的知識を習得する看護職向け教育プログラムを開発することを目的とした。本研究では、本邦で生殖年齢に罹患の多い乳がんに焦点をあてたプログラムとした。教育プログラムはオンラインで学習可能な e-learning 教材として開発することとした。

## ３．研究の方法

全体の研究計画は次の 4 部で構成した：①女性がん患者のリプロダクティブヘルスに関する文献調査、②女性乳がんに焦点をあてた治療を受ける女性がん患者のリプロダクティブヘルスに関する患者・看護師・医師へのインタビュー調査、③女性乳がん患者のリプロダクティブヘルスに関する実態調査-質問紙を用いた全国調査、④女性乳がん患者のリプロダクティブヘルスに関する選択を支える看護教育プログラムの開発。具体的には、以下の方法で実施した。

（１）女性がん患者のリプロダクティブヘルスに関する文献調査：PubMed、CINAHL、医中誌などを用いて国内外の過去 10 年間におけるがん領域における生殖看護に関する文献検索を行う。対象文献は、調査研究や介入研究（RCT、準実験デザイン、評価研究など）、文献レビュー（システマティックレビュー、メタアナリシス）とし、文献から得られた情報をアブストラクトシートに統合し、対象者の特徴、がん治療内容、妊孕性温存に対する選択の内容、患者のニード、また教育的介入を行っているものについては教育プログラムの具体的内容と使用教材、介入方法と効果、介入の回数、所要時間などについて項目ごとに分析し教育プログラム内容に組み込む内容を抽出した。

（２）生殖年齢にある女性の罹患が多い乳がんに焦点をあて、治療を受ける女性乳がん患者のリプロダクティブヘルスに関する患者・看護師・医師へのインタビュー調査：①患者を対象とした調査は、乳がんの診断を受けがん治療を開始する予定の患者、あるいは治療を開始した患者のうち、卵子凍結あるいは卵巣凍結などの温存術を受けることを選択した患者、あるいは温存術を行わないことを選択した患者のうち、研究協力の同意の得られた者約 10 名とした。妊孕性温存について医療者から受けた説明、自身で収集した情報、医療者に対する要望などについて半構造化インタビューガイドを用いてインタビュー調査を行った。②看護師・医師対象とした

調査は、聖路加国際病院、兵庫医科大学病院（もしくは関東、関西地区の医療機関）の乳腺外科/ブレストセンター、血液内科、リプロ外来に研究協力を依頼した。乳がん患者のがん治療もしくは生殖医療に携わる医師、看護師を対象に、妊孕性温存に関して患者に説明している内容、患者からの質問内容、がん患者のリプロダクティブヘルスに関わる医療体制に対する認識と課題などについて半構造化インタビューガイドを用いてインタビュー調査を行った。インタビュー調査で得られたデータは質的機能的に分析し、リプロダクティブヘルスに対する選択の過程で医療者に求める情報、ケアニーズを同定し、教育プログラムに取り入れる内容を抽出した。

（3）女性乳がん患者のリプロダクティブヘルスに関する実態調査-質問紙を用いた全国調査：全国のがん診療連携拠点病院のうち協力の得られた施設において、女性乳がん患者の治療に携わる医師・看護師を対象に Web 調査を実施した。目的としては、女性乳がん患者のがん患者の妊孕性温存に関する知識、態度、学習ニードの現状を把握することであった。

（4）女性乳がん患者のリプロダクティブヘルスに関する選択を支える看護教育プログラムの開発：これまでの調査で得られた結果をもとに、e-learning 教材を開発した。教材の内容は表に示すとおりである(表１)。

表１　e-learning 教材の骨子

| 構成 | 項目 | 細項目 |
|---|---|---|
| 解説 | Ⅰ. Oncofertilityとは | ・基礎知識 |
| | Ⅱ. がん治療における性腺・生殖機能への影響 | ・正常な生殖機能とは<br>・がん治療別　生殖機能への影響、性腺毒性 |
| | Ⅲ. 妊孕性温存の方法 | ・高度生殖医療について<br>・がん患者に適用される方法について |
| | Ⅳ. 心理社会的要因 | ・意思決定の局面<br>・患者の妊孕性温存に関する意思決定過程の心理的変化<br>・費用、経済的側面 |
| | Ⅴ. 看護 | **・各部署における看護ケア**<br>外来（各科別）、外来がん化学療法室、病棟）<br>**・がん患者のケアに携わる看護専門職の資格**<br>CNS（がん看護、リエゾン、母性、遺伝看護・・）<br>CN（化学療法看護、不妊症看護、放射線療法看護） |
| 事例 | 乳がん患者の事例を中心にその他の事例も入れる。 | |
| 知識テスト | 先行研究で使用した知識テスト項目(5項目）と本プログラムオリジナル項目5項目 | |
| 動画 | 2016年度　がんプロセミナー動画の一部を許諾を得て掲載予定 | |
| リンク | | |

４．研究成果

（1）がん治療を受ける女性患者のリプロダクティブヘルスに関する国内外の文献調査では、「Oncofertility」をキーワードに、Medline（PubMed）、CINAHL、PsycINFO、SocINDEX をデータベースとし、発表年及び論文種類の制限をかけず網羅的に検索した。【結果】検索の結果、全データベースから 95 文献が抽出され、重複文献を除いた 77 文献について内容を確認し、英語、日本語以外の言語によるもの(6 文献)、書評、コメント等論文形式でないもの(7 文献)、入手不可能なもの(3 文献)を除外した 61 文献をレビュー対象とした。
文献は、系統的文献レビュー・解説（20 文献）、横断調査（3 文献）、 質的研究（2 文献）、事例研究（5 文献）、 実験研究（3 文献）に分類できた。米国臨床がん学会が 2006 年にがん患者の生殖医療の保護に関する推奨ガイドラインを発表し、以降がん患者のリプロダクティブヘルスの学際的取り組みが始まった。本レビュー対象論文も大多数が 2010 年以降に掲載されており、研究的取り組みは緒についたばかりと推察された。本結果をもとに、本邦の現状把握のための質問紙・インタビュー調査および教育プログラムを開発することとした。

（2）対象は 30 歳代 3 人、40 歳代 4 人の計 7 人、未婚者 4 人、既婚者 3 人（子ども有り 1 人）、妊孕性温存の選択については、卵子凍結 3 人、受精卵凍結 2 人、温存しなかった者 1 人、試みたが採取できなかった者 1 人であった。乳腺外科医からは、がん治療による性腺機能への影響、妊孕性温存療法の方法、温存療法を行うためのがん治療開始の猶予期間等の説明を受け、生殖医療医、専門看護師への紹介も行われていた。生殖医療医からは妊孕性温存療法の具体的な方法、年齢・治療に応じた妊娠の可能性、治療予定と費用が説明され、温存治療を行う他の医療機関も紹介されていた。患者はインターネットのブログや病院で得た冊子、友人、身内等からも情報を得て、年齢やがん治療との兼ね合い、費用、将来の妊娠の可能性に鑑みて意思決定していた。また情報を得たことで、とりあえず採るという心理が働くことも示された。対象は診断後早期の情報提供、がん医療と生殖医療の双方の知識を持った医療者による対応、外来看護師による相談窓口の整備、他の患者の選択について知る機会を望んでいた。
　次に、女性乳がん患者の妊孕性温存に関する、看護師への半構造化インタビューガイドを用いたインタビュー調査を実施した。　対象は、関東・関西のがん診療拠点病院に勤務する看護師で女性乳がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援の経験があり、研究協力の同意が得られた 13 名であった。その結果、外来看護師は、患者の挙児希望の程度を把握し、必要時、生殖医療医への紹介につなげるとともに、患者の精神面に配慮した関わりを意識していることが示された。病棟看護師は、周手術期のケアが中心であるため、妊孕性温存に関する意思決定に関わる機会が限られていた。継続的な意思決定支援の充実には、がん看護、生殖医療に携わる看護師の双方の分野及びがん生殖医療の知識を深めるとともに、施設内・施設間での情報共有・連携のあり方の検討、がん生殖医療の啓発の必要性が示唆された。

さらに、女性乳がん患者の妊孕性温存に関する意思決定において、医師のかかわりの現状を明らかにし、患者の意思決定を支える医療職間の協働への示唆を得ることを目的として、関東および関西のがん診療連携拠点病院で乳がん患者の診療に携わる乳腺外科医、生殖医療医で、妊孕性温存に関する意思決定に携わった経験がある医師に半構造化インタビューガイドを用いたインタビュー調査を実施した。対象は 2 施設のがん診療連携拠点病院に勤務する医師 8 名であった。その結果、がん治療医、生殖医療医の双方が、限られた診療時間の中で、可能な限りの人的、物理的手段を用いて妊孕性温存に関する情報を共有し、患者の意思決定をサポートしようと努める現状が明らかとなった。また、がん治療が高度化する中で、がん治療、生殖医療の双方の知識を有する医療職が、がんの診断後早期から妊孕性に関する治療選択の情報を提供し、患者の意思決定を支える体制を外来で構築することが求められた。

（3）女性乳がん患者の診療に携わる医師の妊孕性温存に関する知識・態度・実践の現状：女性乳がん患者の診療に携わる医師を対象に、がん患者の妊孕性温存に関する知識、態度、実践内容、看護職への要望を明らかにすることを目的として、Web 調査を実施した。対象：全国 434 カ所のがん診療連携拠点病院のうち協力の得られた 96 施設に所属し、乳がん診療に携わる医師 248 人（乳がん学会専門医、認定医含む）であり、148 名からの回答を得た（回答率 59.7%）。調査項目は清水ら（2012）が開発した質問紙をもとに、がん患者の妊孕性に関する知識（5 問）、診療上の実践（13 問）、生殖の問題を議論する際のバリア（8 問）、妊孕性温存に対する態度（5 問）、基本属性を含む計 57 問で構成した。先行研究（清水ら、2012）と比較し、知識テストのスコア、知識十分（fair）群の割合はともに上昇している一方で、態度スコアの上昇はわずかであり、保守的群が 6 割以上を占めていた。近年のがん生殖医療に関する普及活動やガイドラインの開発と周知が知識・態度の向上の一助となっていることが推察された。一方、態度スコアが必ずしも大きく変動しない一因として個々の価値判断による影響が示唆された。

次に、女性乳がん患者のケアに携わる看護師の妊孕性温存に関する知識・態度・学習ニードの現状として、同様に全国 Web 調査を実施した。対象は、全国 434 カ所のがん診療連携拠点病院のうち協力の得られた 112 施設に所属し、乳がん患者のケアに携わる看護師 526 人であり、305 名からの回答を得た（回答率 58.0%）。調査項目は清水ら（2012)および森（2017)が開発した質問紙をもとに、がん患者の妊孕性に関する知識（5 問）、態度(5 問)、妊孕性温存の理解（6 問）と実際の関わり（9 問）、基本属性等を含む計 44 問と自由記載で構成した。その結果、先行研究と同様に、妊孕性温存に関する知識が態度や実践に影響していた。またがん・生殖医療の普及に伴い、妊孕性温存の選択に関する支援に加え、がん治療後の妊娠・出産に向けた長期的支援の必要性が示唆された。

（4）e-learning 教材の開発：文献調査やインタビュー調査、全国調査をもとに骨子を作成し、e-learning 教材を開発した。

図１　Oncofertility とは

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

①高橋 奈津子，<u>林 直子</u>，女性がんサバイバーの妊孕性温存に関する意思決定過程，聖路加国際大学紀要，査読あり，４巻，2018，1-8，

②菊内 由貴，藤田 佐和，上杉 和美，橋口 周子，小迫 冨美恵，<u>鈴木 久美</u>，<u>林 直子</u>，奥 朋子，庄司 麻美，小松 浩子，EBN 実践スキル「エキスパートナース育成事業」報告　がんと就労　その人らしく生きることを支える，日本がん看護学会教育・研究活動委員会報告(2015～2016 年度)，日本がん看護学会誌 ，査読あり，31 巻，2017，145-148
DOI: https://doi.org/10.18906/jjscn.31_fujita_20170727

③<u>森 明子</u>，樺澤 三奈子，松尾 七重，<u>林 直子</u>，中山 直子，女性がん患者のリプロダクティブヘルスに関するオンコロジーナースの学習と連携のニーズ　妊孕性温存療法に焦

点を当てて，日本がん看護学会誌，査読あり，31 巻 ，2017，137-144)
DOI:
https://doi.org/10.18906/jjscn.31_mori_20170831
④鈴木 久美，林 直子，藤田 佐和，小笠 美春，樺澤 三奈子，府川 晃子，上杉 和美，奥朋子，菊内 由貴，庄司 麻美，橋口 周子，小松 浩子日本におけるがん看護研究の優先性 2016 年日本がん看護学会会員による Web 調査 教育・研究活動委員会報告(平成 27～28 年度)，日本がん看護学会誌，査読あり，31 巻，2017，57-65
DOI:
https://doi.org/10.18906/jjscn.31_suzuki_20170411
⑤高橋奈津子，乳がんサバイバーの妊孕性温存に関する意思決定過程における女性の生き方－受精卵凍結保存の意思決定過程に焦点を当てて－，日本がん・生殖医療学会，査読あり，2018，34-49
⑥池口 佳子，五十嵐 ゆかり，三浦 友理子，奥 裕美，宇都宮 明美，櫻井 文乃，高田 幸江，高橋 奈津子，松本 文奈，林 直子，Learner-Centered Model としての LA(Learning Assistant)システムの導入，聖路加国際大学紀要，査読あり，3 巻，2017，41-46
⑦福間佳代，林 直子，ホスピスハワイにおける在宅ホスピスケア，がん看護 21 巻，2017，55-58
⑧松本 文奈，高橋 奈津子，高田 幸江，林 直子，成人看護学(慢性期実践方法)における外来看護教授法確立に向けた取り組み 臨地実習における外来実習を見据えて，聖路加国際大学紀要，3 巻，2017，146-151
⑨鈴木 久美，林 直子，山内 栄子，府川 晃子，がん患者における sense of coherence に関する文献レビュー，大阪医科大学看護学究雑誌，査読あり，7 巻，2017，3-13
⑩鈴木 久美，林 直子，大畑 美里，片岡 弥恵子，池口 佳子乳がん早期発見のためのセルフケアを促す DVD 教材の開発と評価，大阪医科大学看護研究雑誌，査読あり，6 巻 ，2016，23-29
⑪鈴木 久美，林 直子，片岡 弥恵子，樺沢 三奈子，大坂 和可子，今葷倍 真紀，大林 薫，小松 浩子，乳がん体験者との協働による乳がん啓発教育プログラムの開発と評価，保健の科学，査読あり，57 巻，2015，638-643
⑫林 直子，鈴木 久美，今葷倍 真紀，片岡 弥恵子，大坂 和可子，大林 薫，小松 浩子，子育て期の女性および乳がん体験者が考える乳がん検診の受診を促進する要点，保健の科学，査読あり，57 巻，2015，567-573
⑬中山 直子，林 直子 ，細田 志衣，前田邦枝，2013 年度がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン事業 看護国際セミナー報告 在宅緩和ケアにおける高度がん看護実践と課題，がん看護，19 巻，2014，609-612
⑭小島 悦子，林 直子，がん患者の倦怠感の概念分析，日本がん看護学会誌 ，27 巻，2013，42-53
DOI:
https://doi.org/10.18906/jjscn.2013-27-3-42
⑮林 直子，在宅緩和ケアにおける看護師の挑戦 残された時間を在宅で過ごす患者・家族を支えるために(第 1 回) 在宅緩和ケア看護教育プログラムの試み，保健の科学，55 巻，2013，769-774
⑯林 直子，【「緩和ケア訪問看護師」の"実践力"を育てる】"自宅で最期まで"を支える「緩和ケア訪問看護師」育成の必要性，訪問看護と介護，18 巻，2013

〔学会発表〕（計 25 件）
①林 直子，ヘルスプロバイダーセッション 2 －がん・生殖医療における看護職のかかわり，第 8 回日本がん・生殖医療学会学術集会（招待講演），2018
②林 直子，がん患者の妊孕性へのケア，小児がん患者への長期フォローアップケア：その基礎となるエビデンスとアセスメントを看護するケアへ（科研合同企画セミナー），2018
③Process of Enhancing Stress Coping Skils through the illness Experience of Patients with Recurrent Breast Cancer，SUZUKI K，HAYASHI N，FUKAWA A，Asian Oncology Nursing Society(ANOS)，2017
④浅川 翔子，林 直子，中山 直子，外国人患者のケアに携わる救急外来看護師の異文化間看護能力に関わる要因の分析，日本看護科学学会学術集会講演集 37 回，2017，046-2
⑤高橋 奈津子，林 直子，乳がんサバイバーの妊孕性温存に関する意思決定過程における女性の生き方，日本看護科学学会学術集会講演集 37 回，2017，PE-29-4
⑥高橋 奈津子，林 直子，鈴木 久美，中山 直子，府川 晃子，女性乳がん患者の妊孕性温存に関する看護師による意思決定支援の現状と課題，日本がん看護学会誌，31 巻 Suppl．2017，88
⑦林 直子，中山 直子，鈴木 久美，高橋 奈津子，府川 晃子，女性乳がん患者の妊孕性温存に関する意思決定における医師の関わりの現状と課題，日本がん看護学会誌，31 巻 Suppl.2017，287
⑧鈴木 久美，林 直子，山内 栄子，府川 晃子，がん患者における sense of coherence に関する研究の動向，日本がん看護学会誌，31 巻 Suppl.2017，295
⑨池田 真紀子，林 直子，長期に渡り療養生活を送る再発大腸がん患者の「生を支える力」 体験の記述から，日本がん看護学会誌，31 巻 Suppl.2017，236
⑩鈴木久美，林 直子，他，日本におけるがん看護研究の優先性－2016 年日本がん看護学会会員による Web 調査－，日本がん看護学

会誌，31 巻 Suppl.2017,
⑪森 明子，樺澤 三奈子，松尾 七重，林 直子，オンコロジーナースの妊孕性温存療法に関する女性がん患者への対応の困難とチーム間連携における要望，日本がん看護学会誌，30 巻 Suppl．2016，276
⑫川上 小百合,林 直子，細田 志衣，乳がん患者のレジリエンスに関する文献検討，日本がん看護学会誌，30 巻 Suppl.2016，270
⑬林 直子，鈴木 久美，中山 直子，高橋 奈津子，府川 晃子，女性乳がん患者の妊孕性温存に関する選択の現状と課題，日本がん看護学会誌，30 巻 Suppl.2016，233
⑭門脇 緑、林 直子，がん患者が終末期の過ごし方を考えるための一般病棟看護師の支援過程の構造化，第 35 回日本看護科学学会学術集会，2015 ，480
⑮高山 千春，林 直子，経口分子標的治療を継続している進行性腎がん患者の支えとなる体験，第 35 回日本看護科学学会学術集会講演集，2015，479
⑯森 明子,林 直子，樺澤 三奈子，松尾 七重，がん生殖医療の視点から女性がん患者のリプロダクティブヘルスに関する選択を支援するための看護を考える，第 35 回日本看護科学学会学術集会講演集，2015，454
⑰林 直子，森 明子，鈴木 久美，中山 直子，高橋 奈津子，樺澤 三奈子，府川 晃子，大畑 美里，本田 晶子，宇都宮 明美，池口 佳子，櫻井 文乃，細田 志衣，前田 邦枝，増澤 祐子，女性がん患者のリプロダクティブヘルスに関する研究の動向と看護教育プログラムへの示唆，日本がん看護学会誌，29 巻 Suppl．2015，168
⑱高橋 奈津子，林 直子，女性がんサバイバーの妊孕性温存に関する意思決定過程，日本がん看護学会誌，29 巻 Suppl.2015，168
⑲熊田 奈津紀，林 直子，茶園 美香，新藤 悦子，稲吉 光子，中山 直子，子宮頸がんのリスクコントロールへの動機づけに対応したオンライン教育の効果，日本がん看護学会誌，29 巻 Suppl．2015，131
⑳鈴木 久美，大畑 美里，林 直子，片岡 弥恵子，大坂 和可子，池口 佳子，府川 晃子，小松 浩子，乳がん早期発見のための乳房セルフケア促進プログラムの効果，第 34 回 日本看護科学学会学術集会講演集， 2014，292
㉑鈴木 久美,林 直子，大畑 美里，片岡 弥恵子，脇田 和幸，濱岡 剛，乳がん早期発見のためのセルフケアを促す DVD 教材の開発と妥当性の検討，第 22 回 日本乳癌学会総会プログラム抄録集，2014，267
㉒熊田 奈津紀，林 直子，茶園 美香，新藤 悦子，稲吉 光子，中山 直子，子宮頸がんのリスクコントロールに関するオンライン質問紙の作成と適切性の検討，日本がん看護学会誌，28 巻 Suppl.2014，299
㉓ Hiromi Kawagoe，Naoko Hayashi,Yuki Fuso,Kayo Hirooka，Miyako Watanabe，Development of Educational Program for Palliative Care Nurses at Home，sia Pacific Hospice Palliative Care，2013
㉔ Etsuko Shindo，Mika Chaen，Natsuki Kumada，Mitsuko Inayoshi，Naoko Hayashi，Naoko Nakayama，Online Educational Content Development for Reducing Cervical Cancer Risk，5thInternational Cancer Congress(ICCC) ，2013
㉕池口 佳子，林 直子，川越 博美，本田 晶子，大畑 美里，内田 千佳子，中山 直子，緩和ケア訪問看護師教育プログラム開発に向けた文献検討，第 18 回 日本緩和医療学会学術大会プログラム・抄録集， 2013,434

〔図書〕（計 8 件）
①一般社団法人 日本癌治療学会，小児,思春期・若年がん患者の妊孕性温存に関する診療ガイドライン 2017 年版,金原出版,2017,240
②野崎 真奈美，林 直子 ,佐藤 まゆみ，鈴木 久美（編集），成人看護学 成人看護技術(改訂第 2 版)：生きた臨床技術を学び看護実践能力を高める（看護学テキスト NiCE)，南江堂，2017，408
③高橋奈津子、林 直子（著），鈴木久美（編集），女性性を支える看護，医学書院 2014，204
④林 直子（著），成人看護学概論改訂 2 版―成人看護学（看護学テキスト NiCE),南江堂，2015，312
⑤林 直子，佐藤 まゆみ（編集），急性期看護 1―成人看護学 概論・周手術期看護（看護学テキスト NiCE)，南江堂,2015，346
⑥佐藤 まゆみ，林 直子(編集)，急性期看護 2―成人看護学 救急看護（看護学テキスト NiCE)，南江堂,2015，296
⑦林 直子,井上洋士，成人看護学（放送大学教材)第 15 章，放送大学教育振興会,2014，336
⑧森珠美，林直子著，酒井郁子，渡邉博幸編集，どうすればよいか？に答えるせん妄のスタンダードケア Q&A100，南江堂,2014，174
〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

６．研究組織
(1)研究代表者
林 直子（HAYASHI，Naoko）
聖路加国際大学・看護学研究科・教授
研究者番号：３０３２７９７８
(2)研究分担者
森 明子（MORI，Akiko）
聖路加国際大学・看護学研究科・教授
研究者番号： ６０２５５９５８
(3)研究分担者
鈴木 久美（SUZUKI，Kumi）
大阪医科大学・看護学部・教授
研究者番号： ６０２２６５０３